君の横１５センチ

十六夜　あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の横１５センチ

【Ｎコード】
Ｎ９２７５Ｎ

【作者名】
十六夜　あやめ

【あらすじ】
私の限界ライン１５センチ。
天文部に所属している３年生とその後輩の私の物語り。
「わたし、誰かの力になりたいんです！」

月明かりが照らすいつもの散歩道。
何気ない顔でいつも通りの会話をする2人。
高校3年生で天文部の水谷つかさと、その後輩である2年生、高坂乃々香。

部活の関係上、毎日帰るのは他の部活動に比べて遅かった。
帰り道はいつもふたりぼっち。周りには誰もいない。静かな空間に虫の音が聞こえるだけ。

私は先輩の横15センチのところを歩いている。きっと手を伸ばせば届くのだろう。でも、それはできない。なぜなら――これが私の限界ラインだから……。

私たちは毎日帰るときに学校の近くの公園を散歩する。ここの公園には街灯がないため、この場所では星たちがよく見ることができるのだ。そして今日も、宙(そら)にはいくつもの星が輝いていた。

「高坂、見えるか？　あそこにある四角い星座」

「見えますよ。秋の星座の代名詞、ペガスス座ですよね。ねえ先輩、なんでペガススなんですか？　フツウーはペガサスじゃありませんか？」

先輩は小さく唸りながら、鞄から紙とペンを取り出した。
「たしかな、ギリシャ語かラテン語でｐｅｇａｓｕｓって書くんだ。

読み方はｐｅｇａｓｕｓ（ペガソス）。だからな、本当はペガサスは違うのかもしれない」

「へぇー。じゃあもうひとついいですか？」

「難しい質問じゃないだろうな？」

「ダイジョーブですよ。あの星座って半身しか絵がかれてないですよね？　あれは何でなんですか？」

「やっぱり難しい質問じゃないか！　えっと、あれはだな、色々な説があるんだ。天馬と呼ばれるだけあって雲に隠れて見えないとか、あまりにも早すぎて後ろが見えないだとか、人の目では見失ってしまうんだ。実際、正解はないと思う」

「あいまいな答えですねー。天文部の部員として、部長としてそれでいいんですか？」

天文部は全メンバーで6人。3年生が5人と2年生の私ひとり。1年生がひとりもいない部活はここだけだろう。部費もわずかな小さい部活だ。

先輩は私の頭を叩いて言った。

「うるさい。それに、高坂も同じ部員だろ。それくらい調べて勉強しろ」

「イタイ……。でも私はまだ2年生ですよ？　後輩が知識不足なのは仕方がないでしょ？　それに、私にはあと1年以上もあります。きっと私は先輩より知識がついていますよー」

それを言うと、先輩はもう一度私の頭を叩いた。さっきよりも痛かったが、私は先輩と過ごす時間がたまらなく幸せだった。

公園を抜けるといつもの交差点にたどり着いた。赤く光る信号機の前で立ち止まる。先輩との距離は１５センチ。互いに何も話さないまま時間は過ぎて、信号機の色が変わった。

先輩は私に手を振って歩いていった。私も歩き出すと、なんだか振り返ってみたくなった。いつもはそんなこと思わないのに。私はゆっくりと振り返った。すると、先輩がこっちを見ていて、笑い顔で「また明日」って叫んで行ってしまった。

もしかして、毎日私の姿が見えなくなるまで見ていたの？

毎日振り返って、私が振り返るのを待っていたの？

私はずっとそれに気付かずにいたの？

その日私は、先輩の姿がペガスス座のように見失ってしまう夢を見た。

私は朝起きてから嫌な予感がしていた。昨日見た夢の中の先輩が、妙に寂しそうな顔をしていたからだ。私は浮かない気分のまま朝食をとり、学校へ向かった。

学校はいつも通り何事もなく終わり、放課後になった。私は部室に入ると、そこには水谷先輩だけがいた。もともと人数が多い部活ではないから珍しい光景ではないのだが、いつもと違う空気が漂っていた。

「今日はまだ先輩だけですか？」

「あぁ。きっと今日の部活はふたりだけだ……」

「何かあったんですか……？」

沈みきった先輩は静かに話し出した。

――――

「――ってことだ」

「……廃部……ですか……」

先輩が部長として大変なのは知っていた。いつも何かに押し潰されそうなのも知っていた。でも、先輩は何も言わなかった。悩みなんてないみたいに振舞っていた。だから私も知らない顔で振る舞い、何も言わなかった。

明日もまたいつも通り、みんな集まって星を眺められる。そう思っていた。先輩はなんでもないように振舞って、きっと笑いかける。そう思っていた。

でも、そんな余裕がないことに私は気付いていたんだ。知っていたのに、先輩の力になれなかった。

「わたしじゃ……役不足でしたか……？」

「高坂……」

「結局……わたしじゃ誰の力にもなれないんですか……」

「高坂がいつか言っていた言葉、「わたし、誰かの力になりたいんです！」って今でも覚えてる。お前はよく勉強もしていたし、星をいつも見ていた。なぁ、高坂？　なんで天文部に入部したんだ？」

「私は星が好きだからです。だから入部しました。それに、先輩がいたからです。先輩と星を見たくて……。それで、それで……先輩の力になりたくて！」

「――そうか、すっげーうれしいな。なぁ、天文部はいったい何のためにあると思う？」

「えっ？」

「天文部はな、ただ星を見るための部活なんかじゃないんだ。星を見て幸せになってもらうための部活なんだ。自分じゃなく、みんなをだ。星を探して見つけて、喜んだり感動したり、また星を見て幸せな気持ちになりたいと思わせる部活だ。もちろん自分も楽しんでいい。ただな、俺がこの部活に入った時の正式名は、？誰かの力になる部？だったんだ。そう、高坂が言ったとおりだ。俺も誰かの力になりたくてこの部に入った。次の年から天文部になったけどな。

高坂、お前がいなかったらもっと前に廃部になっていたんだ。毎年1人入部しないと存続できないんだ。だから、役不足じゃないし、俺らの力にもなった。本当に感謝してる。でも、今年は1年生がいないだろう？　だから、もう維持できないんだ。よく先生たちも待ってくれたよ。普通なら5月で廃部になってたのに」

先輩は少し間を空けて、

「俺は誰の役にも、力にもなれなかった……」

「そんなことないです！　先輩は私の力になってくれました！　先輩！　私とずっと、ずっと一緒にいてください！」

私は、自ら決めていた１５センチの限界ラインを越えて、先輩に抱きついた。

「先輩が悩んでいるなら私が力になります！　先輩が泣きたいなら傍にずっといます！　私は、先輩の居場所になりたいんです！　先輩を必要とする人はここにいるんです。だから――」

先輩は崩れ落ちる私の身体を強く抱き寄せた。小さな声で「ありがとう」と何度も何度も言っていた。

月明かりが照らすいつもの散歩道。
私の左手は先輩の右手を強く握っていた。
このまま手を離したくない。
公園を抜けた先の交差点。信号機は赤く光っている。
色が変わり、手を離して互いの家の方へ歩いていく。

そして、同じタイミングで振り返り、

「また明日、乃々香！」

「また明日です！　つかさ先輩！」

手を振って歩き出した。

１５センチの限界ラインは今日、ペガスス座のように見失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9275n/

君の横１５センチ

2010年10月11日21時45分発行